

Juichi WAKISAKA Race Report

2012 AUTOBACS SUPER GT Round 6 -FUJI GT 300km RACE-

◆◆ 今季2度目の富士は6位フィニッシュ! ◆◆

No. 39 DENSO KOBELCO SC430		
Drivers	Qualifying	Final
脇阪 寿一 / 石浦 宏明	13位	6位

開催日：2012年9月8日-2012年9月9日

サーキット：富士スピードウェイ（静岡県御殿場市、コース全長：4.563km）

レース距離：66周（301.158km）

入場者数：予選日18,200名、決勝日33,800名、合計52,000名

今シーズンのSUPER GTも残り3戦。いよいよチャンピオン争いがよりクリアに、よりシビアになってくる。今回第6戦の舞台となるのは、静岡・富士スピードウェイ。第2戦に続いて2度目の戦いを迎えるわけだが、前回は不安定なコンディションの中で熾烈な戦いを制し、今シーズン初優勝を遂げている。今回はシーズン終盤に向けていい流れを作るためのレースウィークとしたところ。脇阪そして石浦宏明選手が駆るNo.39 DENSO KOBELCO SC430は、厳しい予選順位から粘り強くチャンスを着実につかみ、6位でフィニッシュ。チャンピオン争いもポイントランキング3位をキープし、残り2戦でのタイトル獲得に望みをつなぐ事となった。



■ 9月8日(土)

09:40-11:20 公式練習
14:15-14:30 ノックアウト予選 (Q1)
14:50-15:00 ノックアウト予選 (Q2)
15:25-15:35 ノックアウト予選 (Q3)

【公式練習】 14番手 / 1'34.843

暦の上ではもうすっかりと秋だが、富士スピードウェイ上空は朝から青空と入道雲に包まれ、やや蒸し暑さを感じるほどだった。午前9時40分からの公式練習は、気温27度、路面温度30度のコンディションで、GT300との混走セッションからスタート。まずステアリングを握った石浦選手だったが、すぐにクルマの不具合を感じ取り、そのリクエストに応えるべく、ピットでの作業が進められた。チームではバランスの確認をはじめ、ありとあらゆる方向からクルマの見直しに着手。ややタイムは小刻みに削っていったものの、コレという改善策が見つからないまま、脇阪がドライブを担当することになった。

コースに向かった脇阪だが、すぐさまクルマが不安定な状況にあることを示唆。チームでは引き続きその解決策を見つけ出すべく様々な手段を試みる。だが、依然として明るい兆しが見えることなく時間だけが過ぎていった。結果、1分34秒843というチームベストのタイムは14番手に留まり、午後からの予選に向けてさらなる改善が求められるという厳しいセッションに終わった。



【ノックアウト予選 (Q1)】 13番手 / 1'34.347

今回の予選方式は前回の鈴鹿に引き続き、ノックアウト方式が採用された。Q1からQ3まで3度のセッションで、その都度出走台数が絞り込まれていく。チームでは、鈴鹿と同じくまずQ1に石浦選手を起用、Q1突破となる上位11台入りを託した。

Q1は午後2時15分からスタート。15分間でのアタックとなる。気温25度、路面温度33度というコンディションの中、大半のクルマが残り8分をメドにピットを離れていった。石浦選手もそのタイミングでコースイン。安定したクルマでの渾身のアタックを見せたいところだったが…、クルマの動きは依然として万全なものとはほど遠く、言うことを聞いてくれない。なんとか1分34秒347と、朝のセッションよりもタイムアップを果たす力走を見せたが、順位は13番手。残念ながらQ1で予選を終えてしまう事態となり、Q2での脇阪の走りを見ることはなかった。

まさかの不調に、脇阪も厳しい表情。「正直、今朝の状態を考えると、予選も Q1 を通れるかどうかのレベルでした。ただ、改善できれば Q3 まで進出し、ポールポジションを狙えたとも思います。そのくらい大きくクルマのフィーリングが変わってしまいました。色々考えると厳しい状況に置かれているわけですが、それでもこういう状況を乗り越えていくこともチームの仕事だと思っています。予選順位を気にしても仕方がないので、明日のレースでしっかりと走るための準備をしたいと思います」ということだったが、クルマの状況については、「なんだかクルマの中に悪いムシが住んでいるような感じ、とでも言えばいいのでしょうか。どこが悪いのか、何が悪いのか、それを探し出すためにみな時間いっぱい手を尽くしたのですが…。残念ながら見つけ出すことができなかったんです。パーツも新しい、古い、関係なく色々と試しました。あらゆる手段を使って確認したのですが、Q1 開始までには完全に見出すまでは至らなかったんです」と説明してくれた。

一方で、厳しい状況の中から僅かながら光も見えているという。「これじゃないか、というものが見つかったんです。今日はもう時間がなかったので、決勝日朝のフリー走行で確認する予定です。その段階でまともに走ってくれば決勝は大丈夫だと思えますね」。厳しい状況の中、チームが全力で取り組んでこそ、力強い戦いができるようになる…。脇阪の言葉には、そういう思いが込められているようだった。



■ 9月9日(日)

09:00-09:30 フリー走行 (09:40-10:00 サーキットサファリ)

14:00- 決勝 (66周)

【フリー走行】 4番手 / 1'34.896

迎えた決勝日。まずはトラブルがどこまで解消されているのか、その見極めのためのフリー走行が始まる。午前9時、気温25度、路面温度31度の中、No.39 DENSO KOBELCO SC430 はまず石浦選手がドライブを担当する。満タン状態のクルマで早速1分34秒896というその時点でのトップタイムをマーク、クルマにスピードが戻ってきた。

その後、ステアリングを受け取った脇阪。安定した好タイムを刻み、決勝でのパフォーマンスに期待がかかった。しかし、後半になってまた新たなトラブルが発生。なおも見直しを強いられたチームだが、前日より確実に改善された部分が多く、決勝では粘り強く戦っていくことが大事だと改めて気合いを入れ直して決勝への準備を進めることになった。



【決勝】 6位 / 5ポイント獲得（シリーズポイント：43ポイント、シリーズランキング：3位）

午後に入り、ますます日差しが強くなり、残暑を思わせるような天気になった富士。気温 29 度、そして路面温度にいたっては 45 度と厳しいコンディションの中、午後 2 時にスタートが切られた。

13 番手からローリングスタートを済ませた石浦選手。早速ポジションを二つ上げ、その後一台、また一台とタイミングを見計らい逆転に成功。一時は 8 番手まで浮上した。前方では数台が激しいポジション争いを繰り広げていたが、石浦選手は燃費走行の一方で、その後方でチャンス到来の瞬間を意識する走りを継続。攻防戦が続く中で、30 周終了まで力走した。

巧みなレースコントロールを見せた石浦選手がピットに戻るや、待ち受けるスタッフが最速の作業を披露。ライバルたちが 32-33 秒という作業時間を費やす中、No.39 DENSO KOBELCO SC430 は 31 秒という短い時間で脇阪をコースへと送り出すことに成功したのだ。戦いを開始した脇阪は、前半で石浦選手が刻み続けたタイムから、後半のペース配分を想定。まずは安定した好タイムを刻みつつ、終盤の攻防戦に対処できるよう、戦略に添った走り続けた。

レース 3 分の 2 を終了した時点では、ポジションは依然 8 番手。だが、着実に前方車両との差を縮めていた脇阪は、ラストスパートをかけるタイミングをしっかりと把握。残り 10 周をメドにペースアップし、あっという間に前のライバルの背後についた。

見どころのひとつは 61 周目の最終コーナー。この周、早い段階から前を走る 38 号車 SC430 の立川祐路選手に詰め寄っていた脇阪は、ダンロップコーナーから強烈なプレッシャーをかけ続けて、プリウスコーナー立ち上がりでは 38 号車にアウト側へ押し出されるも、しっかりとクルマの挙動をコントロールし最終コーナーでイン側に飛び込む。応戦した 38 号車は挙動を乱し、脇阪はそのチャンスを逃さず逆転、7 番手でメインストレートを通過。ベテラン同士の巧みな攻防戦にスタンドも大いに盛り上がった。

そして、猛追劇はまだ終わらない。今度は 35 号車 SC430 の国本雄資選手に目標を定め、激走を見せる。そして 65 周目のプリウスコーナー、1.5 車身程も離れていた差を、国本選手の虚を突き一気にインに飛び込み、瞬間的に仕留め、6 番手をゲット。厳しく苦しい戦いの中でも常に自分たちのベストを尽くし続けた結果、大きく順位を上げてのフィニッシュを果たすことになった。

今回のレースで No.39 DENSO KOBELCO SC430 は 5 ポイントを追加。ランキングは依然として 3 番手をキープしている。タイトル獲得を目指し、次戦オートポリスではさらなる好成績、ずばり優勝を目指して果敢に戦いへと挑むことになる。



暗くて長いトンネルから抜け出し、6位でレースを終えた脇阪。「基本的なトラブルを抱えたままレースをすることはとても難しい状況でした。しかしその中で、チームと一緒に粘り強く仕事を続け、僕もこれまでの経験値をもって対応し、準備を進めた成果が今日の結果だと思います」と安堵の表情を見せた。さらに、「終盤はラスト10周あたりからがスパートするタイミングだと思っていました。チャンスが巡り、うまく38号車をパスすることができましたし、その勢いのまま35号車も逆転したいと思っていました。一度はライバルたちのラップタイムを無線で聞こうかと思いましたが、それよりもとにかく最後まで無心で走り切ろう、という思いが強く、またそれがいい結果につながったのかもしれない」と終盤、サーキットを大いに盛り上げたバトルを振り返った。

ランキング3位を堅守し、残り2戦に挑むことになったことに対しては「トップとの点差は広がりましたが、まだ逆転のチャンスは充分残っています。それに今回何よりもうれしかったのが、レース終了後、ピットに戻ったときのスタッフの笑顔でした。みんなの士気が上がった状態でレースを終えることができたという事実は、レースの結果以上に大きな成果だったと思います。次のオートポリスに向けてまた一生懸命クルマを作ることに繋がっていくはずですよ」と意欲を見せた。

「レースはコース上での勝負です。でもその前に僕らを支えてくれるのは、チームです。つまり、人と人とのつながり、気持ちがあるのが心のよりどころとなるのですが、そういう有り難い環境が揃った中で仕事ができるということに改めて感謝しています。次のオートポリスは路面が新しくなり、今まで以上にしっかりと準備をして挑む必要があります。いつも温かい応援をしてくださるオートポリスのファンの方々の前で喜んでもらえるようなパフォーマンスを見せたいですね。タイトル争いを考えても、勝ちに行かなければ、という思いです。今後も応援なにとぞよろしくお願いします」。

次戦は、9月29日(土)・30(日)にオートポリス(大分県日田市)で開催される。

【Photo Gallery】



